

泌 尿 器 科 紀 要

第 12 巻 第 11 号

昭和 41 年 11 月

随 想

Semen 雑感

大阪医科大学助教授 森 昭

不世出の五冠馬シンザンが、ついさきごろ惜しまれて引退した。競走馬としてはまだこれからの、五才鋭駿である。

勝ち戻る 手綱^{つな}に五冠の 年惜しむ

五冠した丹精の愛馬におくった、武田文吾師の心うつ秀句である。それにしても、優駿、その引きぎわが見事であった。

シンザンはいま種牡馬として、余生を静かに北海の草原に送っている。ところがこの名馬の一回の種付け料が二十万円とか世事に聞いた。絶対と云っていいほど、血統が大きな比重を占める競走馬であってみれば、これは当然のことかも知れない。シンザンの血は今後も永遠に走り続ける筈だ。ちなみに、彼シンザンもまた良血の出であった。

これにひきかえ、われわれ人の世の中はどうだろう。種付け料は男の責任において支払われるのが通例で、ときにはこれが一軒の小料理屋となったり、高級マンションに化けたりする。どこかの国の代議士で、なんと百人に余る女性に種付けをした、まるで駄馬なみの男がいた。莫大な出費を余儀なくされたにちがいない。それかあらぬか彼は、代議士という肩書きを利用して、恐喝、詐欺、脱税と悪事の限りをつくし、このほどやっ と逮捕された。あげく刑務所の中でも、代議士を辞める辞めないのと、さんざん世間を騒がせたことはまだ記憶にあたらしい。なんと往生ぎわの悪い男であろう。名馬と、一応先生と呼ばれた国会議員の差が、これである。馬の風上にもおけない。競走馬であればさしあたり射殺か、薬殺ものである。また、彼の長男も親父と共謀して、多くの悪事を重ねていたといわれる。血は争われないものである。名馬と駄馬の血統にまつわる話でした。

さて、われわれの教室ではここ数年来、ある事情から、人工授精をおこなっている。勿論私はここで、人工授精そのものの功罪、またこれを実施するにあたっての Donor の選定、その他種々の制約について論じる気は毛頭ない。

子を恵まれない夫婦は意外に多い。このうち半数は男性側にその原因があり、さらにこの男子患者の約80%は、いかなる治療法も奏効しない、いわば現代の医学に見捨てられた気の毒な人達である。それでもなお夫婦が子を望むとすれば、それは養子縁組か、人工授精法による以外はない。

Donor はもっぱら本学の学生諸君にお願いしている。元気な若者の、活性度のたかい精液である。にもかかわらずわれわれの場合、その成功率は文献に比してかなり低い。本法の理論と実際についてはかなりの知識を究めたつもりであっても、しよせん婦人科医でない拙劣な手技が、このように不本意な結果を招くのであろうか。いや私は、アダムとイブに創造された自然の節理の厳粛さを、そこにみるような気がする。ごく自然に射精された精子と、

人工的に注入されたそれでは、卵子との結合にいたる過程に、なにか神秘的な、命運の相異と
いったものが、自づから存在するにちがいない。

先日、みるからに元気そうな、可愛い男児を伴った婦人が外来を訪れた。人工児であるその
子はいま、両親の愛情と恵まれた環境の中ですくすくと育っている。是非もう一子欲しい
というのが来院の理由であった。しかも、この子のように利恰で容姿の優れた子をという難
かしい注文である。母親の顔はいかにも満足げであった。むげにお断りするわけにもいきま
い。

B婦人の場合も子供を切望していた。しかし期待に反して、人工授精はその都度失敗に終
った。それでも彼女は、毎月排卵日近くなると、なにかがしかの手みやげをさげて現れるの
である。双方の努力は一年以上も続いたろうか、そのうちぶつり来院しなくなった。とこ
ろがある日、私は彼女を町で見かけたのである。日傘からはみ出た大きなお腹をいたわるよ
うに、ゆっくり歩を運んでいた。さっそく彼女の人工授精記録をしらべてみた。間違いはな
い、しかも私の計算ではすでに臨月の筈である。では、この律気なB婦人は、なぜ妊娠の事
実をわれわれに告げてくれなかったのであろうか。そういえば今までにも、まず成功疑いな
しと思われた婦人で、それ以後ぼったり消息のなくなった数例を経験している。なにか共通
した心理があるように思われる。それは愛児出生の秘密に対する本能的な警戒心かも知れな
い。母親となるべきこの人達は、秘密の漏洩を危惧するあまり、たとえそれが施術した医師
であっても、かたくなにこれを拒もうとする無意識につよく支配されるのではなからうか。

不妊患者に対するアンケート調査成績でも、一部に同様の傾向がうかがわれる。先年われ
われのおこなった調査では、全く無治療の患者から、その後妻の妊娠、出産をみたという解
答がかなり多く寄せられた。これらの中には、睾丸生検像が明らかに Germ cell aplasia で
あったり、すでに irreversible な高度の退行変性を示す症例が意外に多く含まれており、
びっくりさせられた。勿論、極小の組織切片から、Spermatogenesis の全体を判定しようと
する生検法そのものにも若干の疑点はある。しかし次のような推理もなりたちはしないだろ
うか。すなわち、もしこれらの夫婦がすでにわが子の誕生をあきらめ、養子縁組をしたか、
あるいはその決心をしていた場合である。さきの人工児の両親と同様に、複雑な心境になら
ぬともかぎらないと思われる。それにしてもわが国では、その因習的な家族制度からか、嫁、
姑、継子など血縁にまつわる悲話があまりに多い。

巷間に氏より育ちという言葉がある。さて、これら人工児や養子の場合、その将来は氏よ
り育ちであろうか、それとも、育ちより氏ということであろうか。

馬の種付け、人の Insemination とつたない話をすすめてきたが、その私はここ二年来、
いまだに家兎の精液を採取し続けている。自製のお粗末な人工腔に、彼らはためらうことな
く乗駕し、いとも簡単に射精し終るのである。ときにふと哀れに思えたりするが、私にとっ
てこの精液は貴重な研究資料である。

今年もまた馥郁とした菊の香りのただよう季節となった。高い秋の空の下、良血が覇を競
う菊花賞レースもまぢかに迫ったことでもある。余暇の面で、また診療、研究の面でも、私
はまだ当分精液とは縁が切れそうにもない。

Semen 雑感である。ところで Semen は一体誰のものだろう。男性固有のものであるに
はちがいない。といって、世の女性のものでないとは言い切れるだろうか。需要と供給、こ
の必然にして不思議な関係を、つくづく考えさせられるのである。